

調査報告

# 京都大学における 学術英語ライティングのための統一教科書\*

ルブラン キャサリン<sup>#</sup>、スチュワート ティモシー、リーズ デイヴィッド、  
マッカーシー ターニャ、スキッパー サラ、柳瀬 陽介、和泉 絵美、  
吉田 亜矢、ダルスキー デビッド、金丸 敏幸、ミルン ダニエル、  
ライランダー ジョン、笹尾 洋介、横森 大輔<sup>†</sup>

## 要旨

京都大学国際高等教育院附属国際学術言語教育センターでは、2016年以来、全学共通科目「英語ライティング・リスニング」の教員と学生から収集されたアンケートデータに基づき、2冊の統一教科書「EGAP Writing 1: Academic Essays」と「EGAP Writing 2: Research Writing」の編纂に取り組んできた。これらの新教科書とその教師用ガイドは、まず2021年度に専任教員によって2学部で試験的に使用され、その適合性が検証された。この期間中、使用感を把握するために、クローズド/オープン・クエスチョンのアンケート調査を前期・後期のそれぞれ中盤と終盤の2回ずつ実施した。新教科書に対する学生の使用感は概ね肯定的で、中盤と終盤のアンケート結果を比較すると、終盤で尺度項目の回答の平均スコアがわずかに上昇していることが確認された。アンケート結果は慎重に検討され、2022年度の全学部での使用開始に向けた改訂に活用された。本稿では、まず試用の背景を詳しく説明し、続いてアンケートに対する学生からの回答内容を示す。また、その後の全学部での使用についても、調査データと教員からのコメントとともに説明する。最後に、本プロジェクトの現況と今後の展開について簡単に述べる。

【キーワード】 カリキュラム開発、教材開発、アカデミックライティング、一般学術目的英語 (EGAP)、ファカルティ・ディベロップメント (FD)

## はじめに

2015年、京都大学では、学部英語授業の大幅なカリキュラム改定が大学当局によって主導され、各学部の担当教員によって討議された。このカリキュラム改定は、カリキュラムの国際化と日本の若手研究者の英語スキル指導に対して高まる期待と不安に対応する2006年の改定を継承するものである (Maswana & Tajino, 2020)。2015年の改定は、桂山ら (2018) によると、より実践的な

\* 本稿は、本紀要の前号 (第6号 (2023), pp. 119–139) に掲載されたオリジナル英語版 (Kyoto University's New Unified Textbooks for Academic Writing) の二次出版としての日本語翻訳である。翻訳は、英語版に忠実に行った。

† 京都大学国際高等教育院

# 責任著者

英語教育に対する現代の学生のニーズを満たすことを目指してトップダウン的に行われた。2015年改定の新カリキュラムには、必修科目として「英語リーディング」と「英語ライティング-リスニング」の2科目が設定され、2016年度から実施された（詳細はTakahashi, Kanamaru, & Iijima (2020)を参照のこと）。新たに設けられた「英語ライティング-リスニング」は、3つの構成要素—アカデミックライティング、アカデミックリスニング、学術語彙学習—から構成されている。リスニング学習と語彙学習は、授業内で定期的にテストが実施されるが、基本的には自学自習で行われる。リスニングの自学自習のためにオンライン学習システムGORILLAが作成された。学生はGORILLAにどこからでもログインでき、毎週、授業時間外に学術英語のリスニングを練習することができる（桂山ら, 2018, pp. 115–117を参照）。また、語彙については、参考書である単語集『京都大学学術語彙データベース1110』（京都大学英語学術語彙研究グループ, 2009）に掲載されている学術語彙を自学自習する必要がある。しかし、あくまでも「英語ライティング-リスニング」はアカデミックライティングを学ぶことを主眼とする授業である。よって、毎週の授業では、英語での学術的エッセイの書き方が主に指導される。本稿は、この学部1回生用の「英語ライティング-リスニング」でアカデミックライティングを指導するために用いられる教科書について報告するものである。

アカデミックライティングの技術は自然と身につくものではない（Kaplan, 1987）。日本の大学生を対象とした学術英語ライティング授業を指導する教員は、古くから日本文化に内在する帰納的構造を好む傾向（Hirose & Sasaki, 1994; Kubota, 1997; Kubota & Lehner, 2004; Savage, 2022）や、引用慣習に関する先入観（Kamimura, 2014; Teeter, 2015）について考慮する必要がある。アカデミックライティングに関する先行研究を踏まえると、学生が学術英語ライティングの慣習を身につけることを支援するには、構造についての集中的な反復学習（McKinley, 2013）に加えて、定期的な教員からのフィードバック（Colpitts & Howard, 2018）を組み合わせることが必要とされる。つまり、学習者がうまく書けるようになるためには時間がかかり、当然、上達速度もさまざまである。上述のカリキュラム改定のための交渉において、大学は、個々の学生に合わせたより最適なフィードバックを提供するために授業定員を40人から20人へ縮小することに同意した（桂山ら, 2018）。しかし、この変更に伴い、ライティング担当教員が非常勤講師を含めて40名程度必要となるため、コース内容の一貫性をいかにして担保するかという議論につながった。

この問題に対処するため、主に3つの側面からカリキュラムを変更した。1つ目に、アカデミックライティング授業のための統一シラバスが作成された。統一シラバスは、全学部の教員から寄せられた意見を基に、ライティング・語彙・リスニング学習に関するそれぞれの達成基準を明示した。2つ目に、すべての学部1年生が上述の単語集を用いることを求めることにした。この単語集は、京都大学の教員と京都大学英語学術語彙研究グループの大学院生が「様々な学問分野の専門家が、学生が読み書きの対象とすることを期待する学術雑誌から抽出した語彙リスト」（Maswana & Tajino, 2020, p. 74）を基に作成された。3つ目に、初めて教科書が予め準備された候補リストの中から選択されることとなった。10学部が、市販のライティング教科書の精選リストからそれぞれ使用する教科書を選定した。最終的に、前・後期それぞれで3冊ずつ（つまり前・後期で合計6冊）の教科書が選択され、「英語ライティング-リスニング」の授業で使われた。使用される教科書の種類が限られることで標準化を推進できた一方、教科書の構成やアプローチ、内容の違いにより、カリキュラムの目標をカバーする範囲にばらつきが生じてしまった。

使用教科書に関して改善すべきこれらの点は、5年間（2016–2021年）にわたる学期末アンケート

トと教員懇談会における教員のコメントから明らかとなった。一部の教員から、ある教科書は、1セメスターかけて行う15週間の授業に対して内容が不足していると度々コメントが寄せられた。他方、残る2冊の教科書はアメリカの集中英語コース用に作られたものであり、1セメスターで扱うには内容が多すぎるという意見もあった。さらに、「英語ライティング-リスニング」の複数クラスを担当する教員は、同じ科目を教えるにもかかわらずクラスによって異なる教科書を使わなければならないことがあった。これらのフィードバックにより、市販教科書を京大のアカデミックライティングのカリキュラムに合わせようとした結果、つぎはぎだらけの授業になってしまったことが明らかとなった。また毎年、教員が学生の想定ほど指定教科書を使用しなかったことへの不満が学生から寄せられた。学生からのフィードバックを受け、科目責任者は、各授業担当教員に授業内で教科書を恒常的に活用するよう指示した。このような学生や教員からの数々のコメントを受け、同科目を担当する専任講師が2冊の教科書を独自に作成することになった。

新しい統一教科書は、学術英語授業のための教材開発プロジェクトの中心的な成果物である。このプロジェクトは、i-ARRC<sup>1</sup>のミッションである「実践的な言語能力のための教授法の研究・開発」(International Academic Research and Resource Center, n. d.)に基づいている。i-ARRCの英語教育部門(DELE)の専任教員は、2017年より、新科目「英語ライティング-リスニング」の3大要素である、アカデミックライティング・リスニング・学術語彙をよりよく連携させることに着手した(図1参照)。Biggs and Tang (2011)の“Constructive Alignment”の原則に大まかに基づき、各要素のターゲットコンテンツの一部を他の要素でも利用した。これは、カリキュラムの「水平的」調整とみなすことができる。つまり、内容の指導は、コースの構成要素、同じ授業のセクション、または同じ学年間で調整された。これは、異なる学年における内容指導の順次的な統合と進行である「垂直的な」調整とは対照的である(UNESCO, n. d.)。例えば、3年間にわたって、指定単語集から厳選した語彙(京都大学英語学術語彙研究グループ, 2009)を使用して、GORILLAのための広範なオンラインリスニング練習教材を作成した。この教材は、学術場面における文章の構成、文章作成のステップ、文献の引用方法などを説明した発話コンテンツを扱う一方、アカデミックリス

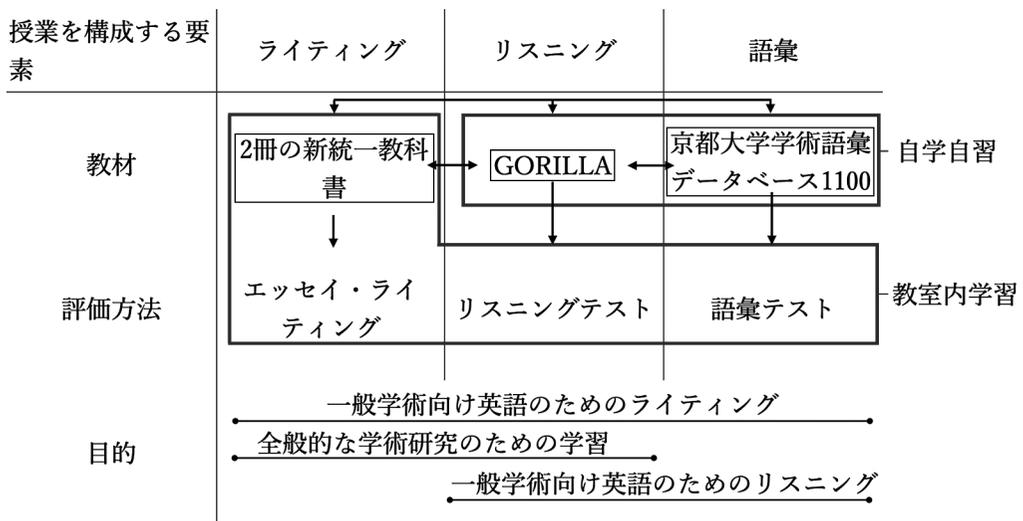


図1 「英語ライティング-リスニング」の授業を構成する3要素の水平的関連

ニングスキルやテスト受験のためのストラテジーといったトピックもカバーしている。さらに、新教科書に掲載されているモデル文/エッセイには、指定語彙集に掲載の単語を多く使用した。

また、英語教育部門の一部の教員によって、語彙評価をより標準化して行うために、すべての授業担当者が使用できるボキャブラリークイズを作成し、その妥当性を検証した (Rylander et al., 2018)。新統一教科書では、アカデミックライティングの作成プロセスが示され、学術論文の基本構造とその機能・特徴が詳しく説明されている。また本書は、学生が文章作成と研究の間をスムーズに往来できるように構成されている。この構成の意図は、図1に示すように、授業の構成要素を水平につないで内容の一貫性を強化することである。学生は、3つの構成要素がつなぎ合わせられた学習を行いながら意図せずとも3つの要素を横断することにより、より良く学習できるようになる。自学自習と授業内容の統合は、Mercado (2015) による「教室と自律学習の統合 (CALI: Classroom and Autonomous Learning Integration)」に類似している。

## 新統一教科書の作成と改訂

新統一教科書の作成は、有志の教員数人のチームによって行われた。チームは2年間にわたり毎週議論の機会を持ち、企画・執筆・改訂を行った。一方で、作成過程を通じて、DELE 所属の教員全員がこの重要なプロジェクトに関与し、皆の意見が尊重されるよう配慮された。協働体制を深めるため、モデル文や練習問題の作成を分担し、オンライン・フォルダーで共有した。加えて、学期ごとに定期ミーティングを開催し、全員が教科書作成の進捗状況を把握した上で、意見を述べたり内容について合意するようになった。さらに、すべての DELE 教員に、オンライン上で共有された原案を閲覧しコメントする権限が与えられた。作成チームの教員以外にも、自発的に校正やコメントに多くの時間を割いた教員たちもいた。この作業サイクルのおかげで、教科書の質を大幅に向上させることができた。最終的に、前期向け教科書に対して9回、後期向け教科書に対して7回の改訂が行われ、それぞれの草稿が完成した。

大学関係者による最初の校閲は、2020年前半に開始された。2020年5月に、新教科書『EGAP Writing 1: Academic Essay』と『EGAP Writing 2: Research Writing』の草稿が英語部会に提出された。英語部会から仮承認を得た後、草稿のPDF版と印刷版が全学の10学部配布され、各学部で検討された。各学部の担当教員には、意見や修正案を提出するよう依頼した。また大学全体から寄せられる意見や修正案をきちんと理解するために、i-ARRCのDELE部門長は、2020年7月と8月に、いくつかの学部代表者とのオンライン会議を開催した。その結果、前期教科書について35件、後期教科書について34件の修正案をそれぞれ得ることができた。修正案としては、書式やレイアウト、文言の明確さ、引用・文献情報のスタイル、句読点、教科書でモデルとなっている修辭法の多様性などについての意見が出された。教科書作成チームは、それら修正案について議論し、改訂の際にはできるだけ多くの意見を取り入れるよう努めることとした。加えて、新教科書に対応した教師用ガイドの作成とシラバスの修正を開始した。

2020年12月、「英語ライティング-リスニング」の新統一教科書と修正版シラバスの使用が英語部会によって承認された。また、新教科書の2022年4月からの正式運用より前に、2021年度から試験的に導入する計画も承認された。ただし英語部会からは、教科書の試験的導入を許可した学部のすべての1回生が新教科書を使用するという条件が出された。学生数が最も少ない2学部から教科書の試験的導入の同意を得ることにより、この条件を満たすことができた。当該2学部

で開講される「英語ライティング-リスニング」は合計7コマだけであったため、すべての授業を専任教員が担当することができた。当該2学部における男女比のバランスが他学部と比べて均一に近かったことは、予定外の利点であった。また、英語部会は書籍としての教科書販売を見送り、PDFデータを京都大学学術情報リポジトリ<sup>2</sup>から無料でダウンロードできるようにすることを決めた。『EGAP Writing 1: Academic Essays』(Stewart et al., 2022a) は2022年1月に、『EGAP Writing 2: Research Writing』(Stewart et al., 2022b) と教師用ガイド (McCarthy et al., 2022; Stewart & LeBlanc, 2022) は2022年2月にそれぞれ配信可能となった。

## 統一教科書の試験的使用：学生に対する調査から明らかとなったこと

教科書作成チーム教員は、すでに2020年度時点で新教科書のために作成された練習問題を実際の多くの授業で試験的に使用していたが、教科書全体の試験的使用は、2021年4月より全面的に開始された。この期間中(2021年4月～2022年1月)、専任教員7名(英語を母語とする教員4名、日本語を母語とする教員3名)が新教科書を試験的に使って授業を行った。特に、教科書の指示が明確であるかどうか、カリキュラムの目標に合致しているかどうかを確認するために、教師ガイドの指示に従って教科書の練習問題を授業で取り扱うことが求められた。また、これらの教師は、フィードバックフォームをオンラインで共有しながら詳細な情報交換を行った。さらに、試用の対象となったクラスの学生に対して、教科書の練習問題についての調査を授業内外で行った。教師からのコメントや学生への調査の結果は慎重に検討され、2冊の新教科書と付属する教師用ガイドが改訂された。

学生への調査は2021年度の前・後期に実施され、PDF化された教科書へのアクセスは容易であったか、練習問題が目標を達成するために効果的であったか、新統一教科書の理解が容易であったか、などの使用感を評価することを目指した。加えて、学生が望む教科書フォーマットと教科書を利用する際のデジタル環境についても尋ねられた。2か国語(英語と日本語)でのこの調査は、前期の第8週終了時(調査1a)と第14週終了時(調査1b)の2回行われた(調査については共にAppendixを参照。ただし、調査1bでは調査項目を一部微修正した)。後期は、第7週終了時(調査2a)と第14週終了時(調査2b)に実施された。調査はGoogle Formsを使って、対面もしくはオンラインの形式で実施された。

これら4回の調査によって明らかとなったデータの詳細を以下で述べる。表1は、各回の調査に回答した学生数を学部別に示している。回答者数は、それぞれ調査1aは94名、調査1bは61名、調査2aは80名、調査2bは71名であった。調査ごとに回答者数が異なるのは、調査は任意であったこと、調査を実施した教員が前期と後期で異なる受講者数のクラスを担当したためである。

表2、3、4、5は、各回の調査でのリッカート尺度(1=全くそう思わない～4=全くそう思う)

表1 2021年度前期および後期に実施した調査の学部別回答者数(n)

学部	調査1a	調査1b	調査2a	調査2b
学部A	44	33	47	37
学部B	50	28	33	34
合計	94	61	80	71

表2 調査1aの尺度項目への回答結果

項目	尺度								平均スコア
	1		2		3		4		
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	
1	0	0.0	14	14.9	56	59.6	24	25.5	3.11
2	4	4.3	27	28.7	36	38.3	27	28.7	2.91
5	1	1.1	15	16.9	63	67.0	15	16.0	2.98
7	1	1.1	7	7.4	38	40.4	48	51.1	3.41
8	4	4.3	24	25.5	54	57.4	12	12.8	2.71

表3 調査1bの尺度項目への回答結果

項目	尺度								平均スコア
	1		2		3		4		
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	
1	0	0.0	5	8.2	31	50.8	22	36.1	3.31
5	0	0.0	8	13.1	24	39.3	27	44.3	3.33
7	0	0.0	5	8.2	16	26.2	37	60.7	3.56
8	4	6.6	24	11.5	54	52.5	12	26.8	3.02

注：調査各回での改訂のリストは付録を参照のこと。

表4 調査2aの尺度項目への回答結果

項目	尺度								平均スコア
	1		2		3		4		
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	
1	1	1.3	12	15.0	44	55.0	23	28.8	3.11
5	0	0.0	12	15.0	48	60.0	20	25.0	3.10
7	1	1.3	5	6.3	35	43.8	39	48.8	3.40
8	3	3.8	25	31.3	37	46.3	15	18.8	2.80

注：一貫性を保つため、項目の番号付けはそのままにしている。その後の調査各回で行われた改訂のリストは、付録を参照のこと。

表5 調査2bの尺度項目への回答結果

項目	尺度								平均スコア
	1		2		3		4		
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	
1	1	1.4	8	11.3	38	53.5	24	33.8	3.20
5	1	1.4	5	7.0	41	57.7	24	33.8	3.24
7	1	1.4	4	5.6	37	52.1	29	40.0	3.32
8	3	4.2	22	31.0	23	32.4	23	32.4	2.93

注：一貫性を保つため、項目の番号付けはそのままにしている。その後の調査各回で行われた改訂のリストは、付録を参照のこと。

による質問項目への回答結果を、実数および割合で示している。表2の項目はいずれも肯定的に評価された。特に、学生の新教科書に対する全体的な印象の良さを尋ねる項目（項目1）の平均点は3.11点、説明や指示の理解のしやすさを尋ねる項目（項目7）の平均点は3.41点であった。同様に、表3のすべての質問項目の平均点は、3.02から3.56の範囲であり、肯定的な回答であったことを示している。

後期の調査（2aと2b）も、前期の調査（1aと1b）と同等の結果を得ることができた。調査2a（表4）では平均点がプラス方向にあり、調査2b（表5）では項目7を除いて平均点がわずかに上昇した。

図2から5は、各項目への回答のうち評価尺度の各段階が占めた割合を調査ごとに示している。図2と図3がそれぞれ示す項目1（全体的な印象）と項目5（学習効果）については、同一 semester 内に2回実施された調査で、いずれも2回目の調査（1bと2b）において1回目の調査（1aと2a）よりも高評価の割合が向上していることから、semester内で改善傾向にあることを示している。特に項目5においては、「そう思う」と比較して「強くそう思う」の回答が前期と比べて約26%増加し、最も割合が増加している。

図4は、教科書の説明文の理解しやすさを問う項目への回答結果を示している。前期の2回の調査（1aとab）を比較すると、図2・3と同様に、2回目の調査において高評価の割合に若干の増加が見られた。一方で、後期の2回の調査（2aと2b）では、2回目の調査において高評価の割合に若干の減少が見られた。

図5は、教科書のモデル文やその他の作文例で取り上げられたトピック分野に対する学生の関心度を示している。図4と同じく、この項目においても前期は2回目の調査で1回目よりも高評価の割合が向上したが、後期では2回目の調査で高評価の割合がわずかに減少した。

図6は、2冊の新教科書（『EGAP Writing 1: Academic Essays』と『EGAP Writing 2: Research Writing』）の第1章から第7章まで、図7は第8章から第14章までの学生にとっての理解しやすさの度合いをそれぞれ示している。多くの学生にとって、いずれの新教科書においても第1章から第7章までの内容の方が理解しやすかった一方で、第8章から第14章までの理解しやすさには個人差が生じたことが分かる。第8章から第14章までの理解しやすさのばらつきには、学生の授業に対する努力や学習進捗状況の違いなどいくつかの要因が考えられる。加えて、どちらの教科書も前半は丁寧に段階づけられた指導が行われ、後半で学生がより自律的に練習をするように設計されていることも要因として考えられる。最後に、教科書で扱うトピックの複雑度は意図的に設定されたものであり、学生が学ぶにつれより知的なチャレンジに挑むためのものであることも述べておきたい。

表6に、学生が選択した教科書の使用形式とデジタル教科書にアクセスするために使用したデバイスに関して尋ねた項目3と4への回答結果を示す。表6の上段は、教科書を配布形態であるPDFのまま使用した学生と、紙に印刷して使用した学生の割合を示している。4回の調査すべてにおいて、大多数の学生はPDFを使用しており、前期の後半でPDFを好む割合が上がり、そのまま後期もその傾向が継続した。教科書デジタル版にアクセスするために利用したデバイスの種類については、表6の下段によると、調査により多少の差はあるものの、多くの学生がパソコンかタブレットを通してPDF版にアクセスしていることが分かる。

上のデータに加えて、調査1a（付録参照）の項目2（アクセスのしやすさ）は、試用期間中（2021年度前期）において、アンケート回答者の約33%にあたる31名の学生が、PDF版教科書へのアクセスに何らかの困難を感じていたことを明らかにした。ダウンロードリンクは京都大学教務情報

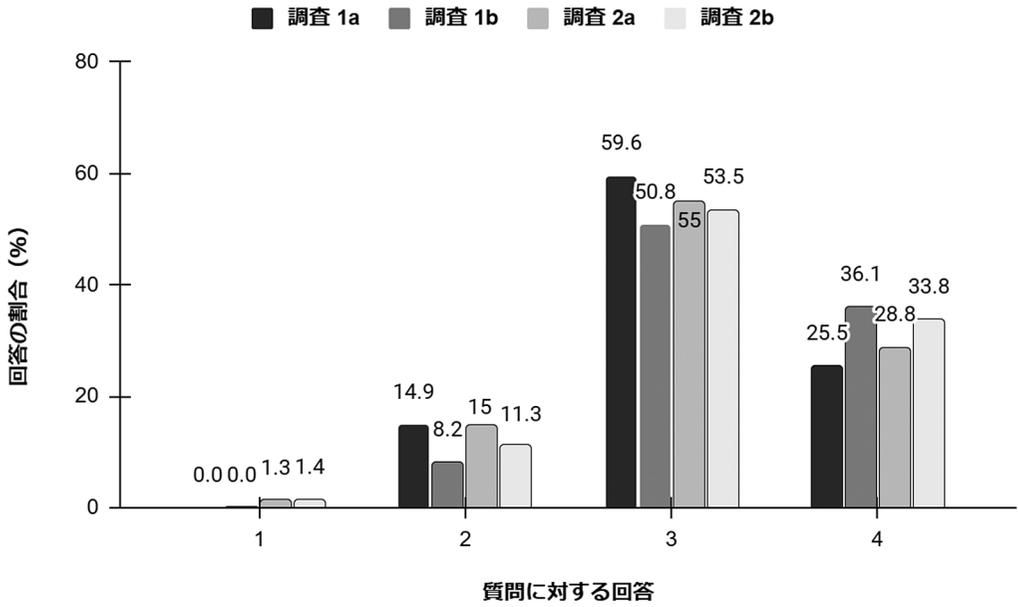


図2 調査項目 1 - 説全体的な印象

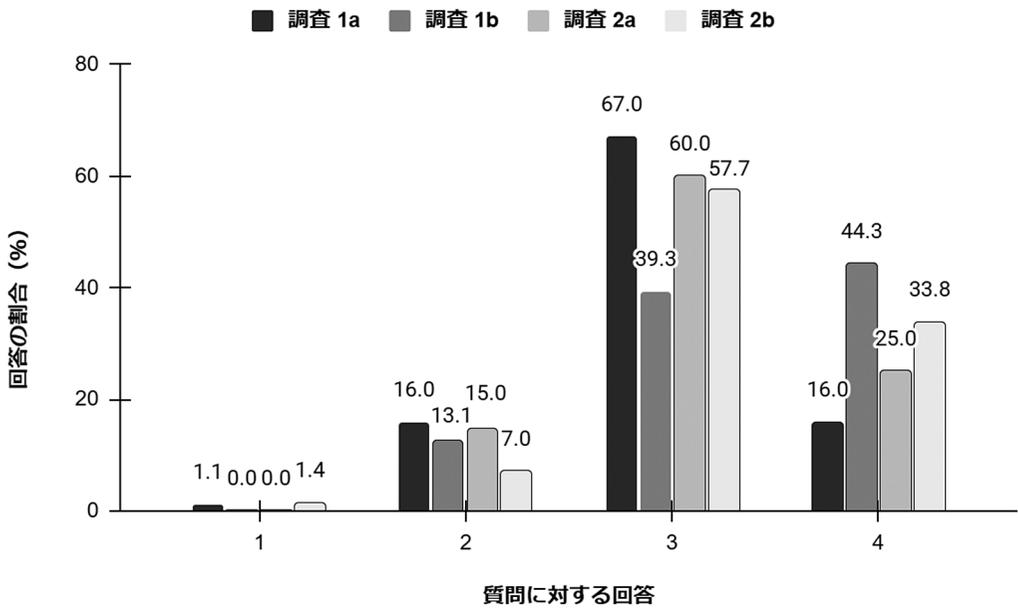


図3 調査項目 5 - 学習効果

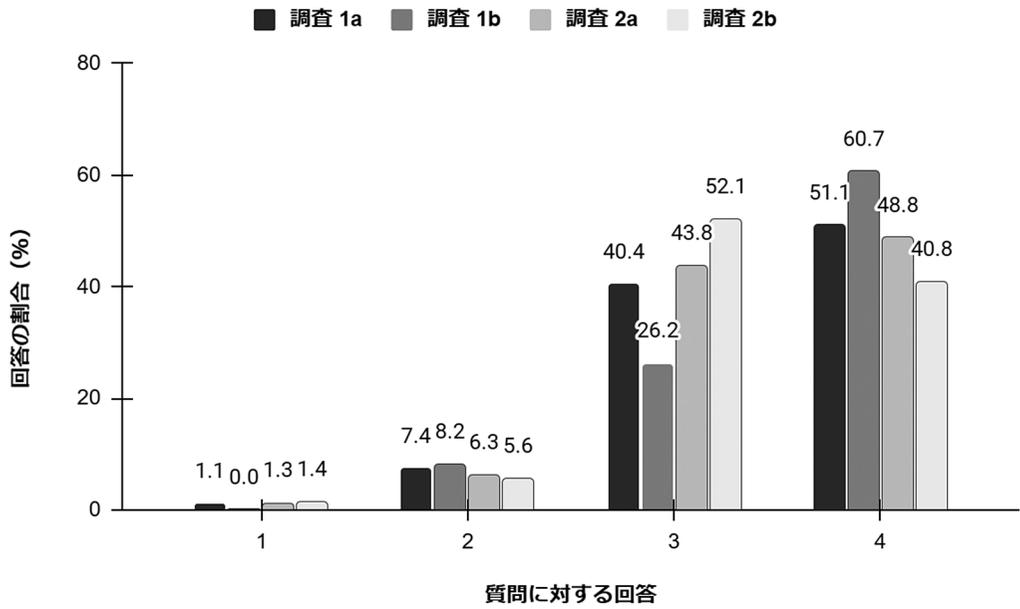


図4 調査項目7 - 説明および指示の理解度

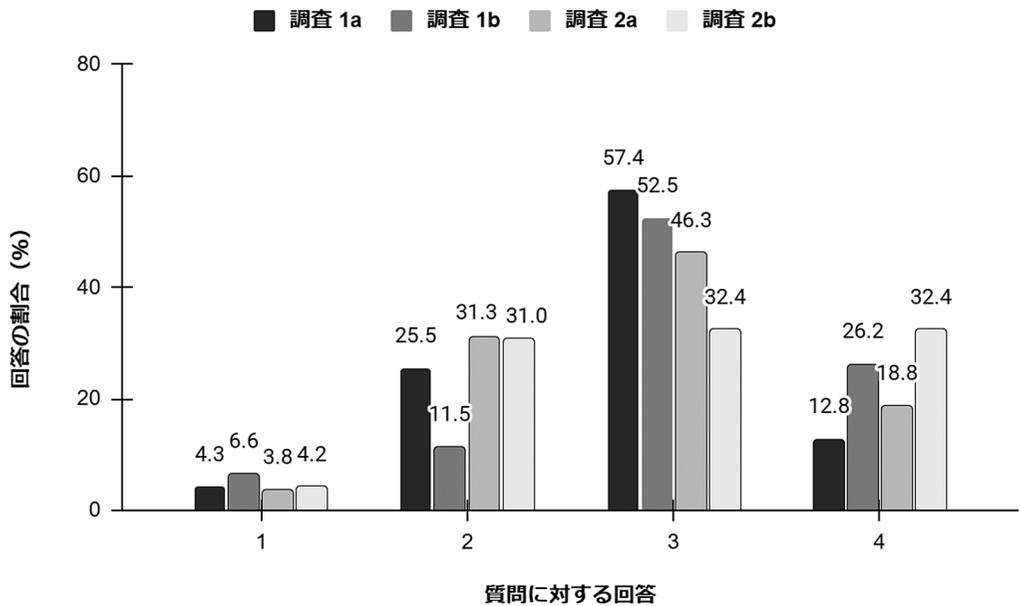


図5 調査項目8 - トピック分野への関心のレベル

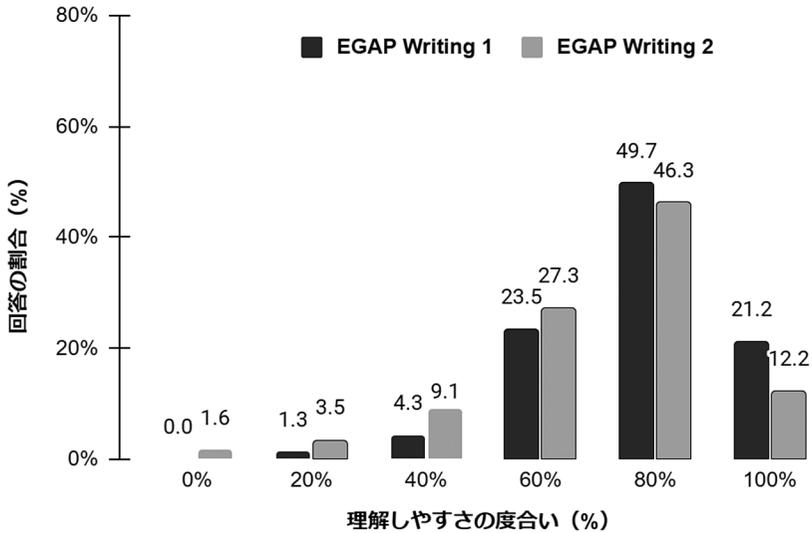


図6 新教科書の1章から7章の学生にとっての理解しやすさ

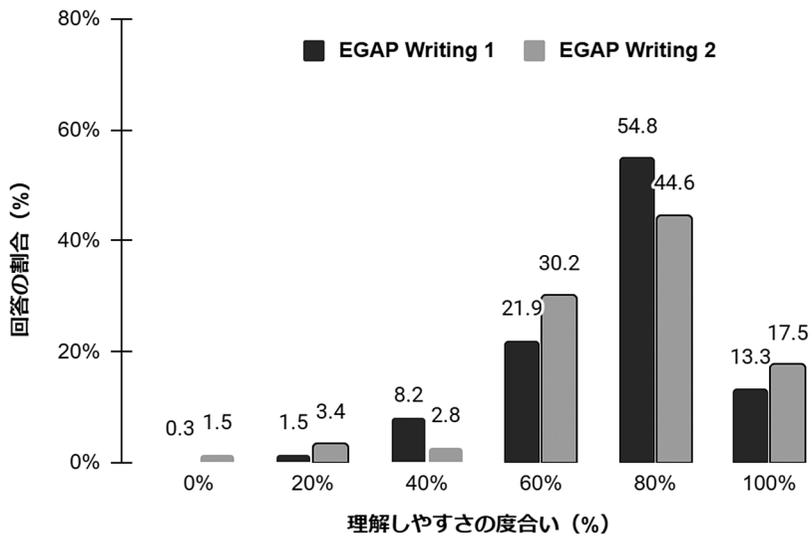


図7 新教科書の8章から14章の学生にとっての理解しやすさ

システム<sup>3</sup>に掲載されている授業シラバスに記されていた。しかし、多くの新生は大学のオンラインシステムに不慣れなために、教科書アクセスのためのダウンロードリンクを活用できなかったのかもしれない。そこで、PDF教科書のダウンロードと使用方法について記した説明書を作成した。教科書使用に関する説明書は、その後毎年4月のオリエンテーションで学生に配布されている。

調査1aの段階でPDF版を利用する学生が比較的多い状況ではあったが、調査1bでは項目2は差し替え、学生が無料ダウンロードPDF版と製本された1,500円の印刷版のどちらの使用を希望するかを尋ねた(1,500円という価格は大学内の印刷業者の見積もりによる)。回答した学生の85%がダウンロード版を希望しており、英語部会が印刷版の販売を見送った判断の適切さを裏付

表6 学生が選択した教科書の使用形式とデジタル教科書にアクセスするために使用したデバイスの種類の割合 (%)

使用形式	調査 1a	調査 1b	調査 2a	調査 2b
PDF (配布形態)	78.7	90.2	90.0	90.1
プリントアウト	21.3	9.8	10.0	9.9
使用したデバイス				
パソコン	79.8	67.2	72.5	77.5
タブレット	12.8	19.7	11.3	14.1
スマートフォン	2.1	1.6	0.0	1.4
パソコン+タブレット	3.2	1.6	6.3	4.2
スマートフォン+パソコン	1.1	9.8	5.0	2.8
スマートフォン+タブレット	1.1	0.0	1.3	0.0

けることとなった。

学生には、各調査の自由記述項目において、新教科書に対するコメントや質問を書き込んでもらった。調査 1a と 1b において 19 件、調査 2a と 2b において 13 件のコメントが得られた。それらのうち否定的なコメントの多くは、PDF の使いにくさについてか、「索引をもう少しわかりやすくして欲しい」といった教科書をより使いやすくしてほしいという要望であった。先述のように、これらの否定的コメントに対応するため、PDF の操作と編集の手順を記した追加資料が作成され、学生に配布されることになった。肯定的なコメントは、教科書の内容や全体的な印象に焦点を当てたものがほとんどだった。例えば、調査 1a では、「FYI [=For Your Information] 部分が面白くてとても良い」というコメントがあった。調査 2b では、「最後の接続詞や参考文献の書き方一覧のところを最も参考になりました」と記述した学生もいた。学生の自由記述コメントは、多肢選択形式の質問項目によって得られた知見を裏付けていると言えるだろう。

まとめると、記述統計の結果からは、新統一教科書に対する学生の評価は総じて非常に肯定的であり、特に学期の後半において評価が高まっていることが示された (調査 1b と 2b)。この評価の高まりは、特に授業目標を達成するための有効性に関する項目 (図 3) で確認されるが、この要因としては、学生が教科書の内容だけでなく授業の設計や目標に慣れてきたことが考えられる。学習に対する学生の意識が高まった要因の 1 つとしては、教科書の内容構成が、明示的な指導から自律的な応用へと進む反復練習のサイクルであったことがあり得る。カリキュラムの目標、教材、教育法の整合性は、学習者の授業目標に対する認識を強化するために極めて重要であると考えられる (Biggs & Tang, 2011)。このことは、学生が教材で強調された技能と知識を何度も応用しているかどうかということからも裏付けられるだろう (McKinley, 2013)。さらに、学生が授業で使用するデバイスに慣れ親しんだことが、調査 1b (表 6) で明らかになった、教科書を印刷して使う学生が減った理由であるかもしれない。同様に、2021 年度前期末よりオンライン形式から対面授業に戻ったことにより、パソコンより持ち運びしやすいタブレットやスマートフォンの使用が増えたと考えられる (表 6)。学生を対象とした調査とその結果は、教員からのフィードバックとともに、教科書作成チームが新統一教科書と教師用ガイドの改訂を続けるために不可欠な情報である。

## 新しい統一教科書の全面導入：教員への調査

2021年7月から8月にかけて、「英語ライティング-リスニング」の非常勤講師に向けて、新統一教科書の編集者による教科書の概要を紹介する動画が公開された。また、新教科書の主な特徴をA4で1ページに要約した資料（最新PDF版のダウンロードリンク付き）も配布された。2022年1月には、教員懇談会に先立ち、すべての「英語ライティング-リスニング」担当教員に向けて、最新版の『EGAP Writing 1: Academic Essays』（Stewart et al., 2022a）の印刷版が配布された。さらに、2022年4月には、『EGAP Writing 2: Research Writing』（Stewart et al., 2022b）の印刷版も配布された。新教科書の改訂版は、今後各年度の開始時期に再版され配布される予定である。また、最新版PDFは、教師用ガイドと併せて、科目運営チームがLMS（“Panda”）上で運営する「English WL Resources」というサイトを通じて担当教員に配布されている。

改訂されたシラバスと新教科書の導入に伴い、すべての授業担当教員が新しい体制にスムーズに移行するためのリソースが必要となることが予想された。そこで、2022年4月、LMS上に担当教員のためのオンラインフォーラムを立ち上げ、すべての担当教員に案内を送付した。フォーラムの運営はDELEの専任教員が行った。このフォーラムでは、掲示板だけでなく、教科書に関連する教材や使用ガイドも公開されている。表7は、掲示板の4つのセクションと期待できる効果を示している。今後、本フォーラムと新しい統一教科書により、カリキュラム改善のための教師間の協働が促進されるだろう。つまり、すべての授業担当教員が、授業改善に役立つ情報をやり取りできるオンライン・スペースを共有することにより、多忙な教員の孤立を減らし、組織としての改善（FD）を推進する可能性がある。

表7 「英語ライティング-リスニング」教員フォーラムのセクションと期待できる効果

セクション	期待できる効果
1) 教科書や教師用ガイドに対する一般的な質問と回答の提示	1) 新教科書使用への移行を支援する。
2) 授業における補助活動のためのアイデアの提示	2) 授業担当者が個別に連絡しなくても科目責任者とやりとりできる手段を構築する。
3) 練習問題に対する解答の提示	3) (かねてより要望があった) 非常勤教員—常勤教員間の意思疎通を円滑にする。
4) 練習問題拡張のための外部情報	

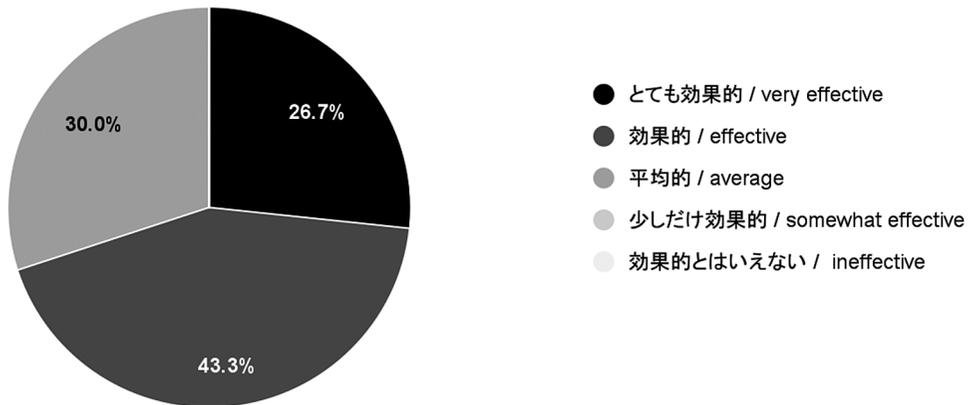


図8 新教科書の練習問題の学習効果

新教材の全面導入が2022年度に始まった後、授業担当教員を対象とした調査が行われた。調査は、担当教員を対象とした従来のオンライン調査に、新教科書と教師用ガイドに関する質問を追加したもので、学期末に『EGAP Writing I: Academic Essays』の練習問題の学習効果を匿名で評価するよう依頼した。図8は、新教科書を使用した30人の教員の回答分布を示している。70%の教員が教科書の演習問題を「効果的」から「非常に効果的」と評価した。教師用ガイドについては、回答者の67%が「役に立った」または「非常に役に立った」と答え、30%が「少し役に立った」と評価した。これらの回答は、新教科書が担当教員に高く評価されていることを示している。自由記述コメントもこの主張をさらに裏付けたが、懸念を示すコメントもいくつか寄せられた。

以下は、『EGAP Writing I』に対する印象を示した担当教員らからのコメントの一部である。

「テキストは以前よりも大幅に改善されており、学生に合っています。余分な内容で教師が悩まされることもなく、教師間で最低限の標準化が保証されています。その一方で、ある程度の柔軟性も確保されています。学生のエッセイにも良い結果がでています。」

このコメントは、オリジナル教科書作成にあたって正に DELE 教員らが期待した点に言及している。新教科書が以前使用していた市販書籍よりも「大幅に改善された」、「学生に合っている」、「学生のエッセイに良い結果が出ている」というコメントから、この教員がカリキュラムと教材との整合性が改善されたと感じていることが分かる。新教科書作成チームは、各授業担当者が自分のやり方で教えることを奨励しながらも、まずは授業の全セクションについてその学習目標を示すことにより、最低限の標準となる方針を確保することを目指した。

「とても使いやすい（以前使っていた教科書よりずっといい）ですが、さまざまなタイプのパラグラフやエッセイに関しては、追加のプリントを配布しなければなりません（特に論証エッセイに関する説明）。また、APA スタイルに関する情報も十分ではありませんでした。」

このコメントでも、同様に教科書が「非常に使いやすい」、「ずっと良くなった」と評価されており、大幅な改善があったことを示している。ただし、このコメントは、教科書にエッセイのタイプのすべてを表示し、アメリカ心理学会（APA）の文書フォーマットをより詳しく示すべきであるとも指摘している。このような要望は後期の教科書では部分的に満たされており、そもそもシラバスによれば、前期の目的はアカデミックエッセイの基本構成要素とともに、プロセスとしてのライティングを学生に知ってもらうことにある。とはいえ、都度の担当学生によってニーズが異なるため、教員はどの学期を担当する場合にでも、補足指導のための追加教材を準備する必要が生じるだろう。これに対処すべく、授業担当教員が前述のフォーラムで授業活動のための補助資料を共有できるよう工夫している。

「新しい教科書はよくまとまっており、教員が自分の指導スタイルに合わせるのに十分な柔軟性がある。しかし、パラグラフからエッセイへの移行がやや早い。学習者たちはまだ自分をうまく表現する方法を知らないで、エッセイに挑戦する前に、もっと body パラグラフを書く練習が必要かもしれない。」

この教員は、テキストの構成には満足しており、練習問題が過度に規範的でない点を評価しているが、基本的なエッセイ（3段落構成によるライティング）の指導に向けてよりじっくりと指導することを希望している。『EGAP Writing I: Academic Essays』のアプローチは、まずbodyパラグラフの基本的な要素を提示し、次にIntroductionとConclusionの構成について示すものである。週1回90分の授業では、アカデミックライティングのすべての側面を満足ゆくまでカバーすることは困難である。また、基本的なパラグラフ構成の指導から小論文の指導に移行する適切なタイミングを判断するのは、学生らの能力に差があることから、教員にとって非常に困難である。

「新しい教科書のおかげで、どのクラスも他のクラスより優位に立つことがないので、採点はより公平になるはずだ。」

この教員は、教科書が統一されたことで成績評価の公平性が増すことを強調し、カリキュラム目標が新教科書に体系的に盛り込まれたことで標準化が進むことを期待している。また、従来多様な学習者向けの市販教科書を使うことによって生じていたかもしれないクラス間での不均衡についても触れている。

調査でのコメントに加え、2022年の前期末に実施された教員懇談会でも、口頭で意見が寄せられた。例えば、ある非常に経験豊富な非常勤講師は、学生のエッセイの質が「今までで一番良かった」と述べ、新教科書を評価した。また、学生に『京大学術語彙データベース基本単語1110』を参照させやすくなったと言う教員もいた。今後、授業担当教員の要望に従って新教科書を改訂するにあたり、今回の調査の結果とコメントから必要な情報が得られた。

## 結論

本稿での説明・議論は、新統一教科書の作成・実施の過程に関する予備調査の結果に依拠している。調査結果から、「英語ライティング-リスニング」の目標や内容の全般的な伝え方について、改善すべき点が明らかになった。多くの学生と教員は、新教科書の使用に対して好意的な態度を示している。しかし、過去の学生集団との比較データがないため、新教科書が学習成果にどの程度直接的な影響を及ぼしているのかを計測することは困難である。カリキュラムの整合性と学習効果をさらに調査するには、より強固な実証的研究の枠組みが必要であろう。

新統一教科書は、「英語ライティング-リスニング」のカリキュラムで京大生がより良く学べるよう作成された。また、約3,000人の学部1回生全員に対して標準化された指導内容を提供することも意図された。この目的を念頭に、授業シラバスに沿った学習目標が教科書の各章で明示された。その結果、学生全員をシラバスに沿った学習へと導くことができたはずである。また、授業担当教員は、学生が教科書の指示や練習問題をどの程度理解しているかといった授業経験を教員フォーラム上で共有し、必要に応じて修正を提案できるようにもなった。加えて、新統一教科書はPDFで配布されるため、学生のニーズに応じた使用・変更を比較的簡単に行うことが可能となった。また、ほとんどの学生は、教科書購入費用がなくなり重い教科書を運ぶ必要がなくなったことを肯定的に評価した。

担当教員にとっては、統一教科書によって授業計画や指導管理が容易になった。特に、複数の大学で教える多くの非常勤講師にとって授業準備にかかる時間は深刻な問題である。また、新統一教

科書は、市販書籍と異なり、京都大学の電子化された所有物である。教員は新教科書を使いながら改善点などを提案し、毎年それらを反映した改訂が可能となる。さらに、PDF版教科書は、スクリーン投影が非常に容易であり重宝する。最後に、授業担当教員は、LMS上の教員フォーラムに自らの補助教材や授業活動の内容等を投稿することで、コースに特化した教材のアーカイブの構築に貢献したり、「ディスカッション・フォーラム」で意見を述べることができるようになった。つまり、すべての教員が授業の発展に直接的に貢献できる場を共有することにより、より強い教員間のつながりと参加権限の広がりを感じることができるようになった。

新しい統一教科書の執筆は、経験豊富な DELE 教員が始動した全面的な「ボトムアップ・イノベーション」(Stoller, 2009)であった。このプロジェクトは、質の高い教育の実現に向けて、教員陣が専門的知識を活かした多くの貢献をしたことを示している。授業のさらなる水平的統合のアイデアとしては、学生のライティング・語彙・リスニング学習を強化するために、短い講義や会話や指導用ビデオへのリンクを教科書のPDFに挿入することが挙げられる。また、場合によっては、教科書と教師用ガイドを組み合わせ、教員用の複合電子書籍にすることなども考えられる。

2015年の大規模な英語カリキュラム改革会議において、大学首脳陣は、「京大英語」を構成する要素を専任英語教員に繰り返し問うた。基本的に、首脳陣が英語教員らに求めていたのは、学生のニーズにより適したカリキュラムを協働しながら作成することであった。それから7年を経て、i-ARRC所属教員は、新しい「英語ライティング-リスニング」の3大要素である「アカデミックライティング」「リスニング」「学術語彙」をよりよく連携させることを目的とした大規模な教材開発プロジェクトを実施し、大学当局が求めた英語教育の改善を達成した。まず、i-ARRCの現・元メンバーが中心となり、全学部の教授陣の協力を得て、『京都大学学術語彙データベース1110』を編纂した(京都大学英語学術語彙研究グループ, 2009)。その目的は、京都大学の様々な専攻分野の学生にとって必読の英文学術雑誌を明らかにし、そこで使われている語彙のコーパスを構築することであった。『京都大学学術語彙データベース1110』から選ばれた単語は、現在、オンラインリスニング学習システムGORILLAや新教科書の練習問題に組み込まれている。さらに、新たに作成されたGORILLAの内容は、新教科書と同じくアカデミックライティングと学術研究の主要な特徴を扱いながら、リスニングストラテジーの練習に焦点を当てている。最後に、「京大英語」という概念は曖昧であるが、学術語彙リストを作成した経験は全学的な協働による目的達成の好例である。EGAPライティング教育の全学的な協力体制の強化は、京大生にとって非常に有益となるであろう垂直統合(UNESCO, n. d.)の可能性を示している。

## 注

- 1 International Academic Research and Resource Center for Language Education (i-ARRC)
- 2 Kyoto University Research Information Repository (KURENAI)
- 3 Kyoto University Liberal Arts and General Education Student Affairs Information System (KULASIS)

## 参考文献

- Biggs, J. B., & Tang, C. (2011). *Teaching for quality learning at university* (4th ed.). Open University Press.
- Colpitts, B., & Howard, L. (2018). A comparison of focused and unfocused corrective feedback in Japanese EFL writing classes. *The Poznan Society for the Advancement of Arts and Sciences*, 60(1), 7-16.

- Hirose, K., & Sasaki, M. (1994). Explanatory variables for Japanese students' expository writing in English: An explanatory study. *Journal of Second Language Writing*, 3(3), 203–229.
- International Academic Research and Resource Center. (n. d.). *Purpose and function of DELE*. Kyoto University. <https://www.i-arcc.kyoto-u.ac.jp/english>
- Kamimura, T. (2014). Citation behaviors observed in Japanese EFL students' argumentative writing. *Journal of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, 18(1), 85–101. <https://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ1047463.pdf>
- Kaplan, R. (1987). Cultural thought patterns revised. In U. Connor & R. Kaplan (Eds.), *Writing across languages: Analysis of L2 text* (pp. 9–21). Addison-Wesley.
- Kubota, R. (1997). A re-evaluation of the uniqueness of Japanese written discourse. *Written Communication*, 14(4), 460–480.
- Kubota, R., & Lehner, A. (2004). Toward critical contrastive rhetoric. *Journal of Second Language Writing*, 13(1), 7–27. <https://doi.org/10.1016/j.jslw.2004.04.003>
- Maswana, S., & Tajino, A. (2020). ESP curriculum development: A systems approach. In H. Terauchi, J. Noguchi, & A. Tajino (Eds.), *Towards a new paradigm for English language teaching* (pp. 66–76). Routledge.
- McCarthy, T., Schipper, S., & Yoshida, A. (2022). *Teacher's guide for EGAP writing 2: Research writing*. Kyoto University, International Academic Research and Resource Center for Language Education.
- McKinley, J. (2013). Displaying critical thinking in EFL academic writing: A discussion of Japanese to English contrastive rhetoric. *RELC Journal*, 44(2), 195–208.
- Mercado, L. A. (2015). Integrating classroom learning and autonomous learning. In D. Nunan & J. C. Richards (Eds.), *Language learning beyond the classroom* (pp. 190–201). Routledge.
- Rylander, J., LeBlanc, C., Lees, D., Schipper, S., & Milne, D. (2018). Validating classroom assessments measuring learner knowledge. *The Institute for Liberal Arts and Sciences Bulletin - Kyoto University*, 1, 83–110. [https://doi.org/10.14989/ILAS\\_1\\_83](https://doi.org/10.14989/ILAS_1_83)
- Savage, M. (2022). A study on the effect of instruction on freshman English paragraph writing. *CELE Journal*, 30, 81–96. [https://asia-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=26250&item\\_no=1&page\\_id=15&block\\_id=22](https://asia-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=26250&item_no=1&page_id=15&block_id=22)
- Stewart, T., & LeBlanc, C. (2022). *Teacher's guide for EGAP writing 1: Academic essays*. Kyoto University, International Academic Research and Resource Center for Language Education.
- Stewart, T., LeBlanc, C., Lees, D., & Schipper, S. (2022a). *EGAP writing 1: Academic essays*. Kyoto University, International Academic Research and Resource Center for Language Education.
- Stewart, T., LeBlanc, C., Lees, D., McCarthy, T., & Schipper, S. (2022b). *EGAP writing 2: Research writing*. Kyoto University, International Academic Research and Resource Center for Language Education.
- Stoller, F. (2009). Innovation as the hallmark of effective leadership. In M. A. Christison & D. E. Murray (Eds.), *Leadership in English language education* (pp. 73–84). Routledge.
- Takahashi, S., Kanamaru, T., & Iijima, Y. (2020). EAP in undergraduate education. In H. Terauchi, J. Noguchi, & A. Tajino (Eds.), *Towards a new paradigm for English language teaching* (pp. 152–163). Routledge.
- Teeter, J. (2015). Deconstructing attitudes towards plagiarism of Japanese undergraduates in EFL academic writing classes. *English Language Teacher*, 8(1), 95–109. 10.5539/elt.v8n1p95
- UNESCO (n. d.). *Vertical and horizontal articulation of the curriculum*. International Bureau of Education. <http://www.ibe.unesco.org/en/glossary-curriculum-terminology/v/vertical-and-horizontal-articulation-curriculum>
- 桂山康司、高橋幸、金丸敏幸、笹尾洋介、スチュワート・ティモシー、ダルスキー・デビッド、田地野彰 (2018)

「京都大学における英語教育改革—英語ライティング・リスニングコースに焦点を当てて—」『京都大学国際高等教育院紀要』1, pp. 111-121.

京都大学英語学術語彙研究グループ（2009）『京大学術語彙データベース基本単語 1110』研究社

付録

調査 1a の質問項目

調査のすべてのバージョンには、以下の序文と調査項目が掲載されているが、後期の *EGAP Writing 2: Research Writing* についての調査では一部が修正されている。

This form will ask a few short questions about the new textbook, *EGAP Writing 1: Academic Essays*. Please be honest with your answers. They might help improve the textbook in the future. All of your responses are anonymous.

このアンケートでは、新教科書「EGAPライティング1：アカデミックエッセイ」に関していくつかの質問を行います。将来的には教科書の改善に役立つかもしれないので、できるだけ正直に答えて下さい。すべての回答は匿名です。

Faculty / Department / 学部

1. (...)
2. (...)

Female or Male / 性別

- Female / 女性
- Male / 男性
- Prefer not to answer / 答えたくありません

Survey 1a Items

1. How was your overall experience with the textbook? / この教科書を使ってみての全体的な印象はどうでしたか？

良くなかったと思う    1    2    3    4    良かったと思う

\*2. How easy was it to access the textbook through KURENAI? / KURENAIを通じて教科書にアクセスすることは簡単でしたか？

全然簡単ではなかった    1    2    3    4    とても簡単だった

3. In what form did you mainly use the Digital PDF textbook? / デジタル教科書を主にどちらの形で使用しましたか？

- As it is / デジタルPDFのまま
- Printed copy / 自分でプリントアウトしたもの

4. When accessing the digital format of the textbook, which type of device did you mainly use? / デジタル教科書にアクセスするにあたって、主にどの機器を使用しましたか？

- Smartphone / スマートフォン
- Personal computer / パソコン
- Tablet / タブレット

\*\*5. How effective was the textbook in achieving the course goals (1 = not effective at all, 4 = very effective)? / この教科書は授業の目標を達成するのにどの程度効果的でしたか (1=全く効果がなかった、4=非常に効果があった) ?

全く効果がなかった    1    2    3    4    非常に効果があった

\*\*6. How well did you understand the content of the chapters that you have covered in class until now? (approximate percentage, leave blank if you have not covered the chapter) /これまで授業で取り上げてきた章の内容をどの程度理解しましたか (おおよその割合, 章を扱っていない場合は空白のままに)

0%    20%    40%    60%    80%    100%

\*\*7. Were the explanations and instructions given at an appropriate level? / 説明や指示は適切なレベルで行われましたか?

適切なレベルでは全くなかった    1    2    3    4    とても適切なレベルだった

8. Were the topics introduced in the textbook appropriate for your area of interest? /教科書で紹介されたトピックはあなたが関心を持つ分野に合致していましたか?

全く合致していなかった    1    2    3    4    十分に合致していた

9. Do you have any comments or questions about the textbook for this course? / この教科書についてコメントや質問はありますか?

\* 注 (\*): 項目 2 は調査 1b では削除され、印刷版教科書の購入に関して尋ねる項目へと変更された。

\*\* 注 (\*\*): 調査 2a および 2b では、項目 2 が削除されたことに伴い、項目 5、7、8 がそれぞれ項目 4、6、7 へと変更された。

## Kyoto University's New Unified Textbooks for Academic Writing

Catherine LeBlanc<sup>#</sup>, Timothy Stewart, David Lees, Tanya McCarthy,  
Sara Schipper, Yosuke Yanase, Emi Izumi, Aya Yoshida, David Dalsky,  
Toshiyuki Kanamaru, Daniel Milne, John Rylander, Yosuke Sasao,  
Daisuke Yokomori\*

### Abstract

Members of the i-ARRC produced two original textbooks in response to questionnaire data gathered since 2016 from both teachers and students of Kyoto University's English Writing-Listening (EWL) courses. This is a report on the classroom trialing of the new unified textbooks for the EWL courses. The new textbooks, *EGAP Writing 1: Academic Essays* and *EGAP Writing 2: Research Writing*, were first piloted in two faculties to assess their suitability. Full-time ILAS faculty members taught the courses according to the teacher's guide for each textbook. The report explains the background of the AY2021 classroom piloting in detail and, subsequently, shows survey responses from students. In AY2021, closed- and open-response item surveys were administered twice, in both the first and second semesters, to learn about students' experiences with the new textbooks. The survey data indicate that students' experiences with each of the textbooks were generally positive, showing a slight increase in the average mean scores for scaled-item responses between surveys conducted at mid-semester and end-of-semester. The survey findings were carefully considered when revisions were made to the textbooks and teacher's guides. New editions of the books were prepared for the full implementation across the curriculum in AY2022. The full implementation is described together with survey data and comments from teachers about the new unified textbooks. Ongoing developments and future ideas for the textbook project are outlined at the end of the report.

**Keywords:** Curriculum development, materials development, academic writing, English for General Academic Purposes (EGAP), faculty development (FD)

---

\* Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

<sup>#</sup> Corresponding author